

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

The Problem of Sense in the Formation of the Logic of Place

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 朝倉, 友海, ASAKURA, Tomomi メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2407

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



場所的論理の形成期における意味の問題

朝倉 友海

神戸外大論叢 第68巻 第2号 (2018年) 抜刷

神戸市外国語大学 研究会

場所的論理の形成期における意味の問題

朝倉友海

1 問題の所在

京都学派の哲学につきまどっているのは、場所的論理はどのように規定されるのか、それは果たして西田哲学から切り離してそれだけで展開させられうるものなのか、という問いである。西田自身が「ローギッシュ・オントローギッシュ」な探究と称したものは、必ずしも西田だけにとどまらず、一般に場所的論理という呼称とともに、しばしば「第四の論理」という位置づけを与えられる¹。形式論理、超越論的論理、弁証法論理との対比で、言い換えれば、それぞれアリストテレス、カント、ヘーゲルに帰される論理（ロゴス）の理解に対して、西田が創始したとされる場所的論理がどのように四つ目のものとして独自の規定が与えられるのかが問われる。だが、第四の論理として位置づけられるかどうか以前に、どのように場所的論理が現象学と弁証法とのあいだで位置づけられるのかをめぐってさえ、解釈者のあいだで意見の一致をみないのである²。

現象学と弁証法との距離を測るためにとりわけ重要なのは、西田哲学において「意味」をめぐる問いがどのように展開されているかを理解することであろう。「意味」をめぐる問いは、西田の著述においては集中的に論じられるというよりは、むしろ長い期間にわたって繰り返し立ち返られ論じられるものとなっており、その位置づけがきわめて見えにくいものとなっている。この論点にもっとも接近して集中的に論じたのは山内得立であり、全体として彼の考察は「意味の形而上学」ないし「意味の論理」として、

¹ 典型的なのは、矛盾的同一性を原理とする弁証法論理と区別して場所的論理の原理として呼応的同一性を挙げる高山岩男の所論である。次に述べるように、山内得立もまた別のしかたで、第四の論理の位置づけを試みた。この点については[朝倉、近刊]で詳しく論じている。

² 最近の一例として、張政遠は西田解釈をめぐる基本的な論点として、弁証法か現象学かという対立を挙げている[張二〇一七、五七―五九]。

西田によって着手された「ローギッシュ・オントローギッシュ」な探究を立て直す試みとなっている³。だが、弁証法に対する敵対的な態度によっても特徴づけられる山内の所論は、弁証法との関係が顕著にみられる場所的論理と符合しない側面をもっており、そのため西田の場所的論理が意味の論理としてどのように位置づけられるのかは十分に明らかにされていない。この点に注意を払いつつ、「意味」をめぐる問いが西田哲学をいかに導いているかを、改めて考察するという課題が残されているのである⁴。

意味の論理という性格あるいは「意味」をめぐる問いを手がかりにして、場所的論理の位置づけという大きな問題に対する解決の糸口が見えてくるように思われるのは、まさに意味の問いをめぐる西田の論述が現象学と弁証法のあいだで揺れ動くからである。西田の諸々の著作を通して見るならば、「意味」をめぐる問いは彼の論述の中で繰り返し蒸し返される、あるいは底流をずっと流れているような主題となっており、しかもこの主題はフッサールとヘーゲルのあいだを行ったり来たりしながら変奏されていくのである。その過程において、とりわけ場所的論理の形成によって、「意味」をめぐる問いじたいもまた、意味と対立させられる「事実」の概念との関係の中でその内実を変化させていった⁵。そのため、一見するときわめて複雑に見える西田の論述に寄り添いつつ、「意味」をめぐる問いとしての場所の哲学を見定めなければならないのである。

そこで本稿では、「意味をめぐる問題」が西田哲学においてどのような位置づけをもっているのかを、以上で述べた諸点を考慮しつつ、場所的論理の形成期に着目することで明らかにする。つまり、場所的論理の形成期の所論（『働くものから見るものへ』・『一般者の自覚的体系』・『無の自覚的限

³ 山内による追究は、諸著作においてさまざまな様相を見せるにせよ、最終的には「意味の論理」という観点により一貫した筋道が与えられ、西田哲学とも重ねられる。最後の著作で山内が言うように、「レンマの立場とは、端的には、意味の世界である」のである〔山内一九九三、一三三〕。とはいえ、山内は彼の構想する「第四の論理」に関して一貫した理論構成を行っていないし、それを西田哲学と重ねる理路もまた、決して明らかではない。〔朝倉、近刊〕を参照にされたい。

⁴ 「意味」の問いをめぐるこのような検証作業は、これまで筆者の知る限り行われてこなかった。意味と密接に関係する「表現」をめぐるのは、これまでも度々論じられてきたし、本稿でも後にこの概念をめぐる考察へと立ち入るけれども、本稿はあくまでも「意味」という観点からそうする点に注意されたい。

⁵ この「事実」概念の変化という論点は、瀧澤克己による高山岩男に対する批判の中で初めて指摘されて以来、西田哲学研究において主要な位置を占めるものとなってきた（『西田哲学の根本問題』、一九三六年）。本稿では、この論点を「意味」という角度から再考することを試みる。なお、西田哲学の研究史上における、「事実」理解をめぐる瀧澤と高山の対立の位置づけをめぐるのは〔田中二〇〇七〕および〔田中二〇〇八〕を参照。

定』の三著作)を中心に検討することで、考察を進める⁶。そして、この作業を通して、現象学と弁証法とのあいだでどのように場所的論理が位置づけられるのかを理解する端緒を得ることを試みる。

2 主導的問いとしての意味の位置づけ

意味がいかなる位置づけをもつかということが、西田哲学の形成において主導的な問いとなっていることは、西田が初めてのものにした本格的な哲学的著作の中で、明確に示されている。『自覚に於ける直観と反省』(一九一七)の主導的な問いは、西田自身が書いているように、非実在としての意味がどのように実在としての事実・出来事と関係しているかということであった。「稿を起こした目的は…現今哲学の重要な問題と思われる価値と存在、意味と事実との結合を説明してみようというのであった」(II 3)⁷。後述するように、このような議論の延長線上において後に場所的論理が生まれるのであり、意味と事実との結合という問題は後々まで西田哲学にまわりついている。そのため、意味の位置づけが西田の思索の中心に位置するといっても、決して過言ではない。

「意味」という語を西田がどのように用いているかを最初に明確にしておかねばならない。西田は、既知のこととして「意味」という語を自在に用いているように見えるが、基本的には、ボルツァーノからフッサールにいたるような「意味」理解を踏襲しており、文ないし命題を通して、つまり何らかのシンタクスによって表現されうる内容のことと理解している。西田は次のように、この語に定義を与えている。

意味とは如何なるものであるか。意味とは語られるものの内容である、話の内容である。就いて語られるものは物である。語るものは人である、私と汝である。(VII 269)

一言で言えば、西田にとって意味とは「言表せられた意味」なのである(V 318)。「意味」という語で示されものを、一般的に広く用いられる語によって「事態」と呼んでもよいだろうし、その由来を明示するためにフッサール

⁶ 森哲郎は、これら「場所」論三部作を一貫して「表現」をめぐる論述として解釈しようとしている[森二〇〇八、七九一―八四]。本稿も多くの論点を共有しているとはいえ、本稿はあくまでも「意味」の観点から考察を行う点に違いがある。

⁷ 以下、本稿では西田の著作への言及は、本来なら新版を用いるべきであろうが、入手困難であることに鑑み(例えば本大学でも所蔵されていない)、最もよく普及している旧版全集の巻数・頁数を用いることにする[西田一九七八―一九八〇]。新仮名遣いへと改めたことと、強調はすべて筆者による追加であることを付記しておく。

ルがそうしたように「構文的ないしカテゴリー的対象性 syntaktische oder kategoriale Gegenständlichkeit」などと呼んでもよいだろう⁸。実際に、西田もまた「表現的意志の構成的形式という如きものが syntaktische Kategorien と考えられる」(V 319)と述べているが、この「構文的諸範疇」により導出されるものこそが「構文的対象性」である⁹。このような観点から西田は、「判断の現象学ともいうべきもの」が「意味其者」との間に「不可分離の関係」をもつと言う(II 49)。西田が「意味」をめぐって「言表せられた意味」ということ以上に立ち入って分析することがないのは、現象学と立場を同じくしているからであると言ってよい。

もっとも、新カント派への依拠がいまだ優勢な『自覚に於ける直観と反省』の段階での「意味」概念をあまりに現象学に引き付けて考えるのは不当であるようにも思われる。同書の成立に至るまでの西田は、彼が当初「純論理派」と呼んだものに新カント派を含めていたことからわかるように、「意味」を「価値」と同一視するような文脈に依拠しつつ、それと「存在」との関係を問うている(II 27-30)。西田が主として念頭においているのは、繰り返される言及から分かるように、リッケルトによる「存在の前に意味がある」というような議論であったし、そこにおいて「意味」は「価値」や「当為」などと言い換えられるのである(II 19, 59)。もっとも、「認識論の二途」でのリッケルトもまた文の意義として意味をとらえているのであるから、西田がそれをフッサールの思想と同一視するのも、その限りでは不当であるとは言えないだろう(I 216-217)¹⁰。だが、西田がどれほど命題構成的なものへと目を向けていたかには、少なからず疑問が残るであろう。

この段階でも「語られるものの内容」という側面が考えられていなかったわけではないことは別の側面から確かめられる。リッケルトへの参照によってはなお不十分にしか示されないとするならば、ヘーゲルへの参照によって確かめられるのである。例えば、自同律の考察を始めるやいなや、

⁸ フッサールの『形式論理学と超越論的論理学』四二節、および『経験と判断』五八節を参照 [フッサール二〇一五] [フッサール一九七五]。「カテゴリー的対象性」の考え方は『論理学研究』まで遡り、そこで重要な役割を果たしている。しかし、『イデーン』第一巻第一節では、なお「構文的対象性」(渡邊訳では「命題構成的な対象性」と訳される)との関係をめぐって、透徹した記述が与えられていない——この点をめぐっては、渡邊二郎による訳注を参照 [フッサール一九七九、三四〇]。

⁹ この点については、イデーンと同箇所を参照 [フッサール一九七四、八五]。

¹⁰ 初期の西田は、リッケルトの論文「認識論の二途」(一九〇九年)へと、なかでもその中で言われる「意味はあらゆる實在「以上」又は「以前」に横たわっている」という主張へと、頻繁に言及を行っている [リッケルト一九二七、三一九]。なお、同論文における「意味」の思想については [リッケルト一九二七、三一四-三一七]。

西田は「判断に表さるべき同一者は主語の「甲」でもなければ客語の「甲」でもない、此等のものは同一者が自己を顕現する手段である、否同一者其者を構成する要素である」と論を進めている(II 48)。実在的なものを、主語の位置に置かれる名詞に相当するとするのでも、述語の位置に置かれる名詞に相当するとするのでもなく、むしろ両者へと分化するところに成立する判断に相当するものとするのは、ヘーゲル的な考え方に沿うものであり、西田が常に立ち返るのは「すべての事物 Ding は判断である」という洞察なのである。あるいは、一般者の限定において事物はあるということである¹¹。さらに、「推論式は単に我々の主観的思惟の形式ではなく、すべての実在の形式である」ということであり、こう述べるとき西田が参照している『エンチクロペディー』(第三版)一八一節にあるように、「すべては推論である」ということである(II 71)¹²。すべては判断ないし推論であるというのは、「語られるものの内容」へと目を向けることに等しい。あるいは意外なことかもしれないが、ヘーゲル論理学への参照を通して、シンタクスにより言い表されるものの対象性へと目が向けられているのである。

現象学ではなく新カント派に強く傾いていた段階においても、ヘーゲル論理学の影響のもとで、「語られるものの内容」としての意味へと西田が目を向けていた点に、西田哲学の特徴を理解する鍵がある。よく知られているように、後に西田が「場所」の考察に進むときに依拠していたのが主語・述語関係をめぐる考察であったのも、ヘーゲルにいたる論理学を意識してのことであった。『働くものから見るものへ』(一九二七)所収の諸論文で論理的な主語・述語関係の考察を通して西田は「主語とならない超越的述語面ともいふべきもの」として「場所」の概念に辿り着く(IV 316)。それは一転して「判断的一般者」をめぐる考察となり、また「推論的一般者」へと進んでいくのである。一方、ヘーゲル論理学を参照しつつ、西田は「語られるものの内容」としての意味を見失うことはない。「すべての判断が包摂判断であるというのではないが」と断りつつ西田は、「何等かの意味に於て述語可能であるということ」によって「知る」ということを考えている(V 12)。「判断の前に意味自体の了解、命題自体の了解がなければならぬ」のである(VI 13)。このように西田は、いわば現象学と弁証法とのあいだに立って、意味の問題に取り組んでいる。

¹¹ 『エンチクロペディー』一六七節、なおここでは訳文には従っていない[ヘーゲル一九九六]。

¹² すべてが判断であるということ以上に、この「すべて実在は推論式的である」という点に西田は繰り返し立ち返っている(II 220, 225)。

少なくとも場所的論理の成立期までの「意味」をめぐる問いは、現象学だけでなく弁証法とも深い関係をもっていた。この観点からすれば、ヘーゲル論理学で言うような「事物」とは、むしろ事態すなわち構文的対象性に他ならないことになるし、実際に西田の議論はそのような発想に沿って展開するのである。西田の立ち位置はフッサールの論理的考察をドイツ観念論と結びつけるところにある、と言ってもいいかもしれない¹³。したがって、山内得立が「意味的論理学」を強調するのは、なるほど西田の路線とも重なっているものの、そのあまり弁証法を斥けようとするのは少なくとも西田の考え方に相応するものではないと言わねばならない¹⁴。

とはいえ、西田が現象学とも弁証法とも異なった独自の路線を進んでいくことを示すためには、なお多くのことが論じられねばならない。『自覚に於ける直観と反省』の中心的な議論は、「意味の世界から実在の世界に移る難点は意識作用の起源にあること」をめぐる展開されている(II 6)。このように、意味を「非実在」として位置づけ、意識作用の起源に遡ろうとする点で、西田は決して弁証法的ではない。たとえ西田が早くからヘーゲルに親しんでいたとしても、また後に自らの立場を「弁証法」と呼ぶに至るとしても、西田の思索をこの語で片づけることはできないのである¹⁵。「ヘーゲルの如く所謂実在界をも一つの具体的概念と見るならば、概念、実在界、意識の三つのものは皆具体的一般者の様々なる象面と見ることができると述べつつも、西田は続けて「私は所謂概念を以て直に真実在とか又知るものとか考えるのではない」と断っていることに注意しなければならない(V 17, 20)。一方で、「意味の世界から実在の世界に移る難点」を執拗に追究していく点は、単純にフッサールと同一視することを許すわけではなく、あえて言うならばカント的でもあるとも言えよう。

以上から分かるのは、意味と事実との関係をめぐる問いを決して手放し

¹³ 次のような西田の論述を参照（なおこの箇所には後に再び触れることになる）——「フッサールなどの有意味体験 *intentionales Erlebnis* というものは余の所謂意味其者の発展ともいふべき直接経験である、意味即事実、事実即意味なるフィヒテの事行 *Tathandlung* の如きものでなければならぬ」(II 157)。同書で西田は確かにフィヒテを持ち出しているが、結局のところそこで考えられているのはむしろヘーゲルであり、「真の実在は自覚的でなければならぬ、即ちヘーゲルの概念の如きものでなければならぬ」と述べている(II 298)。

¹⁴ さらに言えば、後述するように、西田は意味と事実との関係をめぐる問いを執拗に追究するのに対し、山内は「存在の意味」という一語であっさり済ませる点でも、両者のあいだには大きな隔りがある〔山内一九六七、二五—二六〕。

¹⁵ 藤田正勝が言うように、たとえヘーゲルに対する「近さ」が「その初期の思索のなかにも見いだされる」としても、「本質的な（立場に関わる）「近さ」が意識されたのは…『無の自覚的限定』以降」のことである〔藤田一九九四、一六三〕。なお、この点には後に再び触れる。

はしないところに西田哲学の大きな特徴があるということである。では、西田による意味と事実との関係をめぐる問いの追究を、どのように位置づければよいのであろうか。西田の考察を性急に現象学と同一視するのも弁証法と同一視するのも、ともに過度の単純化であると言わねばならないとすれば、その独自性はどこにあるのかを明らかにするための端緒は、まさにこの位置づけにあるだろう。この位置づけを行うために、場所的論理がどのように姿を現わしてくるのかを次に検証しよう。

3 表現作用をめぐり意味への問い

よく知られているように、西田は場所の概念に到達する際に、表現という問題を通してきている。表現をめぐり考察はそれ以降の西田の考察において継続されることから分かるように、後期西田の最重要のテーマの一つであるが、それはまず、場所の概念をもたらしものとして姿を現したのである。『自覚に於ける直観と反省』において西田が「絶対意志」と呼んだものは、要するに意識作用の根源であり、そこから意味と事実は分岐すると考えられた¹⁶。それは、活動する「我の現在」或いは「時間を超越し、却って時間を創造する絶対的自由の我」であり、「時空を超越した「永久の今」とも云うべき我々の意志其者」に他ならないとされた(II 256, 265, 331)。それに対し、『働くものから見るものへ』の前編で、意志をめぐり考察が表現をめぐり考察へと深化することで、「場所」の概念の導入がなされる。したがって大きく見れば、意味と事実をめぐり考察が、意志から表現へと考察の場を転じていくことにより場所的論理が形成されるのである。その過程を、『働くものから見るものへ』前編の三つの論文(「直接に与えられるもの」・「物理現象の背後にあるもの」・「表現作用」)を通して追ってみよう。

西田は「直接に与えられるもの」つまり直接与件をめぐり考察の中で、それはむしろ芸術家が見る世界のようなものだとし、いわゆる絶対意志の立場を芸術的直観へと結びつけた。「直接に与えられるものは、所謂知覚の世界の如きものではなくして、芸術家が見る如き直観の世界でなければならぬ、即ち意志の対象界でなければならぬ」と言うのである(IV 21)。この「主客合一の芸術的直観の如きもの」こそが、そもそも西田の出発点でも

¹⁶ ここにきて西田はコーエンが言う「メー・オン」の延長線上に、「応無所住而生其心」(『金剛般若経』)などという表現を持ち出すことになるが、この段階では、その思想はまだ仏教的な文脈のもとにおかれているわけではないことに注意が必要である(II 283)。なお、西田哲学と仏教との関係をめぐっては、拙論[朝倉二〇一四]第二章を参照にされたい。

ある「純粹経験とかいうべきもの」なのであり、「対象化することのできない自己」なのである(IV 23-26)。芸術的なものは「材料を離れてあるのではない、色や形を離れて画家の理念はなく、音を離れて音楽の理念はない」(IV 13)。それはいわば意味と事実のもっとも直接的な結合に係っているのである。このような着想が表現の考察へと西田の思考を導いていく。

だが、たんに芸術に目を向けるだけでは、まだあまりに「主観的」な方向に偏していると言わねばならないであろう。そこで西田は次の論文「物理現象の背後にあるもの」では一転して、「動かすことのできない事実」の背景にあるものは意志であるという点に注意をひきもどす(IV 51)。知識の客観性や、動かせないものとしての事実というものの背景に絶対意志があるという論点に立ち戻ろうとするのである。論述は再び表現を通じた意味の考察から離れるものとなるため、芸術的なものと物理的なものとのあいだで西田が見せる大きな振幅はいまだ目立った成果をもたらしてはいないと言えよう。

大きく揺れ動くことで、直接に与えられるものとして遂に見定められることになるのが、表現作用である。表現作用とは表現をもたらす行為のことであるが、次の二点に注意が必要である。第一に、表現作用といっても、それまでの意識の作用という時の「作用」とはいささか異なった観点から言われている点。後述するように、後に「行為」と呼ばれる概念の原型がここにあると言わねばならない。第二に、西田は表現作用を、芸術と物理とのあいだをつなぐものとして言語へと着目することによって見定めようとする点。言語表現は「意味の世界」にかかわり、必ずしも「主観的」なものではなく、むしろ「客観的」なものの基礎となる。そのため、言語表現に着目することで、西田は芸術といういわば主観的なものと、物理現象といういわば客観的なものとのあいだをつなぐのであるが、ここで重要なのは言語表現と芸術的表現とがともに「表現」として考察されるということである。以上の二点は、西田の考察に本質的な前進が起こったことを意味している¹⁷。

論文「表現作用」において表現ということ考えられるのが、先にも触れられた芸術的表現だけでなく、広く言語表現をも含んでいることは、い

¹⁷ このような展開は、前の著作『芸術と道徳』で準備されていたものではあった。そこで西田は(フィードレルを介して)「言語をたんなる抽象的な「記号」と見なすことから、「表現」へと考え直すように」なったと言えよう [岡田二〇〇八、三一]。だが本稿では、このような展開を詳細に追っていく余裕はない。

かにもフッサールの『論理学研究』などを想起させる¹⁸。表現作用においては、表現されるもの、すなわち「表現せられる内容」は意味であるが、それはすでに客観的なものである。加えて、いわゆる「表現其者」はさらに「客観的事実」として実在の世界に属している。だが、その先に展開されるのはあくまでも西田自身の課題をめぐる考察であり、表現作用をめぐる意味と事実との関係の追究が、直接に与えられたものの考察とぴったりと重ねられ、論じられるのである。

表現の位置づけを、意志から表現への移行という観点から見てみよう。まず、意志が意味と密接に結びつけられることで、「すべてが意味に充ちた表現である」という視野が開かれる(IV 167)。これにより、表現は意志よりも広く、いわばそれを包むと考えられることになる。意志は表現作用の一種にすぎず、後の言い方を用いれば「意志的作用即ち行為も一種の表現作用と考えることができる」のである(V 116)。こうして、言表ないし「語られるものの内容」から客観的な実在を見る立場が獲得されるだけでなく、そこからさらに実在の具体的な形成作用へと考察を進める端緒が得られるのである。西田はこのように述べている。

意志自身を内に含む立場、即ち直観の立場からしては、此世界は表現の世界となる。言語によって表現せられる意味の世界は、時と人とを離れ、それ自身に於て永遠なる世界である、主知主義者の考える如く全実在界を意味化することができ、全実在界は意味の世界の中にあるとも考えられるのである。(IV 168)

ここで西田が言う「表現の世界」とは、絶対意志をも含み直接に与えられるものを見たものである。それはすでに、「言語によって表現せられる意味の世界」としてとらえられるのである。だが、もちろん西田はそこに留まるのではなく、実在を形成し行く創造的な作用としての芸術的形成作用へと進むのであり、このように議論を続けている。

単なる意味の世界は実在界を包むことができない。思惟の内容は超越的ではあるが、自己自身の中に表現の質料を有せない。之に反し芸術的内容に至っては主客合一にして、作用其者が直に表現となるのである、時其者の中に含む永遠なる実在の相を見ることができる。併し芸術的内容も未だすべての意志を否定し、実在其者を表現化するとは云われない…すべての理想的なるものと実在的なるものとの交叉点ともいべき身

¹⁸ 広く知られているように、同書でフッサールは、まさに「表現と意味」をめぐる考察によって現象学の基礎を築いた [フッサール一九七〇、三〇—一六]。

体に於て、表現の内容、作用、表現其者が一である。身体其者を表現化することによって、すべての実在を表現化することができる。(IV 168-169)

これに続けて西田は芸術から「宗教的立場」にまで一気に話を進めているが、ここで「身体」というものを通してすべてを表現と見るような立場が一気に開けてくることとともに、今は立ち入ることができない。ここで強調したいのは、意志の立場から先に西田が歩みを進めることができたのは意味の問題を通してであったということと、言語によって表現される意味の世界から「すべての実在の表現化」へと芸術的創作を通じて一気に考察が進められること、の二点であり、これらにより西田は意志の立場から表現のそれへと移行するのである。

表現の一環として言語表現が考察の中心に据えられることにより、言表に即して「意味」の問題が改めて表面化する。言葉によって言い表されることで「意味の世界」というものが成立するのであり、「我々の思惟の根底には言表の世界がある」(IV 158)。こうして言語によって「客観的精神の立場の上に立つ」のであるが、さらに芸術においては、「表現せられる内容其者の中に、作用が含まれて居るといことができる、意味其者が働く、意味が実在を含むと云うことができる」と西田は言う(IV 160-161)。なぜそう言えるかという、芸術的創作作用は「自然の創造に等しきもの」だからである(IV 162)。つまり、芸術的創作は、主観的なものではなくむしろ「主客未分」の、直接に与えられたものであり、そこにおいては意味こそが実在を形成するのである。つまり、表現が意志を包むということは、言い換えれば、意味が実在を含むということでもあるのだ。このように、言語や芸術を通して、西田は意味と実在との関係に目を向けているのである。

こうした考察には、後に場所的論理と呼ばれるものが胎動している。意味や表現の世界を見るのは意志の立場ではなく「直観」の立場であると言われるが、「直観」とともに登場するのが「場所」の概念なのである。表現作用の考察により「場所」の概念は成立してくるのである¹⁹。

もっとも、「場所」という語にあまり惑わされないようにしなければなら

¹⁹ 「動き行くものを、場所其者の立場から見た時、働くものは表現となるのである」(IV 167)。同論文に対して小坂国継は、「「場所」の考えがようやく熟し、後はそれを表現する「述語の論理」を待つだけの段階に達している」と評している[小坂一九九一、一九五]。しかし、この段階で重要なのは「「述語の論理」を待つだけ」ということよりも、むしろ「表現作用」の考察が進められている点である。この点を見逃すならば、以降西田哲学において「表現」がキーワードになることが理解しがたくなるだろう。注目すべきはむしろ「「場所」と「表現」との併行」なのである[森二〇〇八]。

ないし、西田の考察がまだ揺れ動いていることに注意しなければならない。『働くものから見るものへ』後編の中核となっている論文「場所」において、西田が、真の無の場所において「すべて存在的有は変じて繫辞的有とならねばならぬ」と述べているのは、その一例である(IV 231)。西田はここで、もはや表現作用を介さずに、意味の考察から直接に場所の考察へと向かうのであり、「場所」の概念とともに西田は判断作用に主軸をおいた「具体的一般者」の考察へと進んでいる(IV 229-236)。「具体的一般者」の考察、つまり判断的一般者から推論的一般者そして表現的一般者へと進められる考察の出発点は、繫辞的有つまり命題によって示されるものとしての意味の世界にある。そのため西田は、「判断の述語的方向をその極致にまで推し進めて行くことによって、即ち述語的方向に述語を超越し行くことによって、単に映す意識の鏡が見られ、之に於て無限なる可能の世界、意味の世界も映されるのである」と言う(IV 270)。論文「場所」では、意志をも見るような「直観」とか「場所」とか呼ばれるものが「意味の世界」を見る立場に即して考えられることが、より明確に示されているとはいえ、表現作用をめぐる考察は表面上は消えているのである。

論文「場所」での、表現をめぐる考察を素通りするような論述は、西田解釈の上で躓きの石となる。高名な同論文によって場所的論理が示されているとするならば、表現をめぐる考察が見過ごされてしまう恐れがあり、それは西田哲学の特徴を捉え損ねることにもつながりかねない。表現作用の考察の独自性は、それが形成作用という点から見られているということであり、つまり「行為」の観点から考えられている点にある。そうでなければ、表現作用は意志をも含むものとは言い得ないであろう。後に西田が述べるように、「自覚的意志が自己自身の立場を超えて、自己自身を表現するものとなる時、行為的自己となる」のである(V 118)。表現というものは「意味の了解」ということからのみとらえられる傾向があり、そのとき表現は単なる意味の世界に即して考えられることになる。それに対して西田は、あくまでも表現作用つまり芸術的創作をモデルにした表現的形成作用のことを考えようとするのであり、これは西田が(しばしば現象学との対比を通して)「弁証法」という語で後に言い表していくものである。表現は単なる了解ではなくむしろ行為と結びつくというのが、場所的論理の形成を導く洞察なのだ。

こうして、場所的論理がまさに姿を現わそうとするとき、意味と事実との関係は急速に流動的なものとなる。別の角度から見れば、それは現象学

と弁証法とのあいだでの揺れ動きであるとも言える。真の無の場所は、そこにおいて意味の世界が見られるものであるとするならば、それは表現作用と無関係ということになるし、意味と事実の関係も従来のように問われなくなるだろう。しかしそれは現象学の立場に立つことを意味している。それは「ノエシスの方向に意志的自覚を越えて自己自身を見る知的叡智的自己の立場に立つ」ということになろう(V 147)。つまり、「知的叡智的自己の一面のみを見て居る」のであって、それに対して「意志的なる叡智的自己の立場」(フィヒテ)や「情的なる叡智的自己の立場」(シェリング)があり、さらに「一般者の限定」をめぐる思考があることを西田は忘れることがない(V 169)。そこで西田は、表現や行為へと考察を戻すことにより、彼がいう弁証法的なものへと軌道修正しようとするのであり、このような揺れ動きのなかで、場所的論理は次第に形成されていくのである。その過程をもう少し追ってみよう²⁰。

4 実在把握をめぐる意味への問い

表現作用をめぐる考察によってもたらされた「場所」の考え方は、表現作用をも含めた「事実」概念の深化を引き起こすことで、場所的論理を形成していく。「事実」の概念に新たな深化をみることにより解決されることになるのは、初期から西田を導いていた意味と事実との関係をめぐる問いである。言い換えれば、意味と事実の関係をめぐる問いの解決をもたらした思想こそが、場所的論理と呼ばれるのである。その形成は、以下で見るように、現象学と弁証法とのあいだでの揺れ動きがいわば最高度にまで強まることを通してなされる²¹。

『一般者の自覚的体系』(一九三〇)では、意志作用や表現作用を含めて新たに「行為」という語で把握されるものから「内的生命」と呼ばれるものへと考察が進められるが、このような議論のために西田は敢えて、それまでになく現象学に接近しようとする。冒頭からノエシス・ノエマの区別を導入する論文「叡智的世界」では、西田の考察が現象学との対峙に向か

²⁰ 西田は「表現」を「隠れた根本語」としつつ後に至るまで考察を行った[丹木二〇一五、七七]。本稿ではこの点について論じる余裕はないため、稿を改めて考察を行いたい。

²¹ 大橋良介は、『自覚に於ける直観と反省』の前半で西田が現象学に接近しつつも「現象学的反省という道を捨てる」ところに同書の「後半が始まる」と述べている[大橋一九九五、六〇]。とはいえ、同書でフッサールとの対決が終わったわけではないこともまた事実である。まだ新カント派への言及が多い同書の段階を超えて、とりわけ「場所」論文以降に、西田はよりフッサールに接近しつつ決定的に離反していくことを、以下で検討する。

って突き進んでいることを物語るこの区別を通して「行為」が位置づけられる。つまり、「私は私の行為を知ると云うことを以てノエシスの超越を証し得る」として、いわば深い自己の内容として考えられるのである(V 156)。したがって、「行為」をめぐる議論を評価するためには、『一般者の自覚的体系』での、さらに言えばその中の論文「叡智的世界」以降の、ノエシス・ノエマ的構造の導入が果たしている役割を明らかにしなければならない。

突如として導入されたかのようなノエシス・ノエマの区別が、西田の思索のなかで果たしている役割は、ある種のとらえ難さをもっている。周知のようにフッサールが『イデー I』(一九一三)で、志向性に関する用語を整理して導入した、意味付与がそこにおいて遂行されるものとしてノエシス的契機、およびその相関者としてのノエマの意味などの術語に西田は早くから親しんでいたはずだが、それを自らの思索に取り入れようとはしてこなかった²²。それが、ここにきて説明らしき説明もなく突如として導入され、以後長らく用いられていくことは、一見すると不可解である。このような印象が決して現代の読者にとってのことだけでないことは、この点を瀧澤克己が早くに取り上げ論じていることに示されている。

ここでは、ノエシス・ノエマの区別が果たしている役割を、『一般者の自覚的体系』の議論の進行に即して次の二点に整理しておきたい²³。

第一に、作用という語を用いず、またノエシス・ノエマの両面を見失わず、考察を進めるためである。西田は長らく(『論理学研究』のフッサールと同じく)「作用」という語を愛用してきたが、表現作用を考察の中心に据えるにいたって「作用」という語を使い続けるのが難しくなった。作用と行為という二つの語がまぎらわしくなるのである。論文「叡智的世界」で行為の位置づけが以前より明確化されることになるのは、ノエシス的方向に見られる行為が、同時に、ノエマ的方向において表現をもつという点に注意が向けられた結果である。確かに、西田が最初から強調するのは、「意

²² 「ノエシス的契機またはノエーゼ(ノエシス)」についてフッサールは、「ヌースという語は…ほかならぬ「意味(ジン)」という語義を、思い起こさせてくれる」と述べている[フッサール一九八四、九五]。なお、『イデー』に代表されるノエシス・ノエマの枠組みと『論理学研究』の志向性理論との距離をめぐるっては、様々な議論がなされているが(例えば[富山二〇一四])、本稿では立ち入ることができない。

²³ 瀧澤による西田のノエシス・ノエマ的区別をめぐる古典的研究(「西田哲学に於けるノエシスとノエマとの関係について」、一九三五年)でも「二つの意義」が区別されている[瀧澤一九七二、二七七―二九一]。だが、瀧澤はあくまでも両面の対比について二義(具体と抽象、肯定と否定)を区別するのであり、以下で両面の相関が果たす役割に注目して挙げた二点とは、全く位相が異なっている点に注意されたい。

識作用が斯く志向せられるもの、即ちノエマの方向に於て超越的であると考えられると共に、作用的方向即ちノエシスの方向に於ても超越的と考えられねばならない」という論点であり、ここで「ノエシスの方向への超越」と言われているものも、単に述語的超越を言い換えただけのように見える(V 124)。だが、行為は、意志的なものをも含めた「表現」をノエマ的方向にあるものとして、そのノエシス的方向を考えることによって位置づけられるのである²⁴。こうして、表現と行為とが相関するものとして把握されることになる。言い換えれば、「行為と表現とが一つに見られ」ることとなる(VI 5)。新たな「行為」概念は、ノエシス・ノエマの枠組みの導入に負うところが大きいのだ。

第二に、ノエシス・ノエマの両面を一体として、この相関それ自体がどう生じるかをめぐって新たな考察の視野が開けるといえる点である。西田は、「一つに見られ」る行為・表現の相関そのものがどのように生じるかを問うことで、表現と行為とが成立するまさにそのことを、新たに「事実」という語で呼ぶことになる。このような洞察の萌芽はもっと早くから見られるのであるが、「事実」ないし「出来事」を非実在的な意味に対比させて実在とする枠組みに依然としてとどまっていた段階では、十分に展開されることがなかった²⁵。今や、ノエシス・ノエマ的構造の導入によりもたらされた表現と行為との相関に助けられ、単純な対立関係がもはや成立しないような、対立がいわばずれてしまっているような意味・事実的關係の把握へと西田は新たに進んでいく²⁶。西田の言い方だと、事実的なものが「ノエマ的限定とノエシス的限定との両方向へ考えられて行く」のである(VI 41)。事実とは、表現と行為との分岐に先立つ絶対的に原初的な生起であり、「内的生命」なのである(V 409)。

以後の西田はここに実在というものを見定めていくことで、その論理と

²⁴ 次の箇所を参照にされたい。「我々の行為と考えるものは、意識的自己を越えた自己の限定である、自己自身の無を見る自己限定の意味を有ったものである。我々の自己が絶対無の自覚に接着した時、その最も深いノエシス的限定の意義を行為に求めることができるであろう。行為的限定に対してノエマ的に現れるものが表現である。」(V 395)

²⁵ 西田は『自覚に於ける直観と反省』でも、すでに志向的体験(有意味体験)が「直接経験」であり、「意味即事実、事実即意味なるフィヒテの事行の如きもの」であるという洞察を獲得していた(II 157)。

²⁶ この点で、瀧澤克己は高山岩男の「事実」理解が、前期の理解をひきずっている点を批判して、「高山氏が説明するが如き事実はたかだか前期西田哲学の「事行」とか「純粹経験」とかいうものであって、「表現的自己の自己限定」の論文に説かれる「事実」ではない」と述べているのは正当である[瀧澤一九七二、一三〇]。しかし、後期西田の新たな「事実」理解の特徴を瀧澤が明らかにしているわけではなく、とりわけ言表の役割については同論考の中で見過ごされている。

して「弁証法」という語を多用していくことになる²⁷。ノエシス・ノエマの構造の導入によりもたらされる新たな「事実」理解により、西田は歴史的世界や社会的なものをめぐる考察へと踏み込んでいくことになった。というのも、「意味の存在を決定し、意味に存在を与えるもの」として歴史的世界は「事実」であるからだ(V 333)²⁸。それはすぐれて時間的な側面から把握され、「自己限定の底に過去幾世の因縁を見ると共に、過去幾世の因縁を自己限定となすこと」として、自己の成立そのものを通して見られる(V 412)。

歴史的なものだけでなく、西田は社会的なものをめぐる考察へも踏み込んでいった。事実とは、(この語に代えて「永遠の今の自己限定」に即して西田が言うように)「社会的・歴史的世界」なのである(VI 9)。社会的なもの、ないし間主観的なものの考察は、ノエシス・ノエマの相関を通して次のように進められる。

私と汝とは対象的に相対するのではなくして、自己の生命の底に於て相対するのである。働く方向に於て相対するのではなく、生れる方向に於て相対するのである…云わば、斯くノエシス的に私が汝に対する世界に於て、私はノエマ的に表現的なものに対するのである。(VIII 349)

行為としてとらえられたノエシス的方向において他者関係が考察され、ノエマとしては表現の世界が、ノエシスの方には人格的な世界が位置づけられる。このような「ノエシス的方向」における「社会的意識」の考察は、ノエシス・ノエマの区別の導入とともにすでに考えられ始めていた(V 132)。だが、その考察が本格化するのは論文「私と汝」以降であり、実在把握の進展によるものである。

以上のように「事実」概念の深まりにより「社会的・歴史的世界」が深く考察されるようになるだけでなく、その考察の中で相関が、決して手放されることなく西田の考察を牽引していく。したがって、「ノエシス・ノエマ的構造」の導入は、やはり決定的なものであったと言わねばならない。

しかしながら、この新たな「事実」概念は、ノエシスとノエマの区別と密接に結びついて社会的・歴史的世界をめぐる考察へと進むという側面だけでなく、また意味の問題と深く関係しているという側面をももっている

²⁷ しばらく後に西田はこのように書いている。「直接に与えられたものは、主客未分以前ののものであるとか…云うのは、知的自己の立場からの見方である。…行為的直観の立場からは、世界はいつも弁証法的に形作られたもので又形作るものである。」(VIII 368)

²⁸ この箇所(『一般者の自覚的体系』)ではまだ「事実」の概念は安定していないため、念のため次の著作(『無の自覚的限定』)での記述を付け加えておこう。「事実的なものを見るというのは固、歴史的なるものが見られるのでなければならぬ、すべて事実的なものは先ず歴史的事実の意義を有っていなければならない」(VI 46-47)。

ことが見逃されてはならない。実際、社会的なもの（社会的意識・共同的意識）は言語と無関係に考察されることはできない。ノエシス的方向への超越は、言表された内容としての意味をめぐる考察をまたもや呼び寄せるのである。

『無の自覚的限定』（一九三二）の第一論文「表現的自己の自己限定」にて、「事実」として新たに把握されることになったのは、「此鳥が飛ぶ」というような言表によって示される出来事であり、事実とか実在さらに出来事と呼ばれるものが、言表の次元でとらえられている。このような「事実」理解は、西田が初期に示していたものとは明確に異なっていることに注意せねばならない。「事実」はもはや意味と対立させられるのではなく、いわば意味の側から、つまり言表の内容ということから考えられているのである。

では、「此鳥が飛ぶ」という事実の把握とは、どのようなものなのか。それは「此鳥が飛んだ」という知覚的事実とは異なっていると西田は言う（VI 167）。後者は、すでに範疇ならびに時間空間の形式に「当嵌まったもの」であるにすぎず、つまりは単なる表象に他ならない。それに対して、西田はこのように述べている。

自己の存在ということは場所が場所自身を限定することでなければならぬ、而して私が事実が事実を限定するというのはかかる限定を意味するに外ならない。自己自身を限定する瞬間的今の自己限定として、此にかかる事実があるということである。「此鳥」が飛ぶというのではなく、「此鳥が飛ぶ」という事実があるということである。…唯かかる命題によって言表せられる事実そのものが、自己自身を限定する今の内容として自己自身を見て居るのである。（VI 168）

「此鳥が飛ぶ」というのは、「自己自身を限定する瞬間的今の自己限定」として、「自己自身を限定する今の内容として」立ち現れる。それはまずもって永遠の今の自己限定として、意味の次元の中にあるものとして生じてくるのであり、言い換えればそれは、絶対無の自覚的限定として立ち現れるのである。知識と呼ばれるものも「自己自身を限定する事実そのもの」なのである（VI 166）。

こうして意味と事実は、自覚（絶対無の自覚）の程度によって区別されるものとして位置づけられることになる。「自覚」の有無という一点において、「意味の世界」と「事実の世界」のあいだには歴然とした差異があるものの、意味から事実への移行という西田が長らくこだわってきた問題は、もはや難点とはみなされないだろう（VI 5-6）。「行為的自覚の意義が失われ

たとえられる時、見られるものはもはや事実の世界ともいべきものでもなくして、単なる意味の世界となる」のである(VI 35)。逆に言えば、事実の世界は、「意味の世界が自己自身の自覚的限定の意義をもった時」に成立するものと位置付けられる(VI 37)。つまり「意味の世界」と「事実の世界」は、それぞれ絶対無の自覚的限定における「無自覚的内容」と「自覚的内容」とされ、両者はほとんど紙一重のものとして、しかし決定的な隔たりをもったものとして、位置づけられるのである。

ノエシス・ノエマ的構造の導入によってそれまでになくフッサールに接近した西田は、同時にそれにより意味と事実との関係に新たな解決を与える糸口をつかみ、この新たに見出された「事実」の論理へと向かっていった。このような思考を西田は、もはや「弁証法」の名で呼ぶことを躊躇することはない。ここに示されているのは、フッサールとヘーゲルのあいだを揺れ動いた末に、遂に独自の立場を確立したという確信である。場所的論理の名で呼ばれるこの独自の立場の中心にあるのは、意味と事実とを区別するのが自覚（絶対無の自覚）であるという思想であった。

5 結論

場所的論理の成立に至るまでの西田の思索における「意味」をめぐる問いを正當に位置づけるために、現象学的な考察があくまでも弁証法論理への参照を伴って進められているという点を強調しておく必要がある。この観点から、例えば山内得立のように「意味的論理学」を強調するあまりに弁証法を斥けるのは、少なくとも西田の考え方に相応するものではないことは明白である。むしろ西田の考察は、フッサールとヘーゲルとを併せつつ独自に進められたものであると言わねばならず、どちらか一方に引き寄せることでその性格は大きく見失われてしまうのだ。

西田の思索において「意味」をめぐる問いは、まずは意味と事実との関係をめぐる問いであった。つまり、意味から事実へといかに移行するか、という問いであった。意味と事実とを対立するものとしてとらえる観点からこのような問いが出されていたわけだが、ここで重要なのは、「意味」が一貫して言表の内容として把握されているという点であった。このような一貫性は、事実ないし実在の概念が場所的論理の形成過程において大きく変化するのは、まったく対照的である。また、言表の内容としての「意味」は、現象学というよりもむしろ新カント派ならびにヘーゲル論理学（概念論）に即して考えられる傾向にあり、ここに少なからぬ独自性がある。

一方で、事実ないし実在の概念が場所的論理の複雑な形成過程において変化するのも、意味への問いによってである。まず、意味と事実との結合として「表現作用」の概念が西田の思索の中心に来ることにより、意志をも含んだより広義のものとしての行為という把握がもたらされる。すべてを表現として見るのが、いわゆる「場所」の考察であり、場所的論理とは、いわばすべてを表現（意味）と行為として見るような思想に他ならない。言うまでもなく、これこそが絶対意志に意味と事実の統合を見る段階からの大きな進展である。さらに、表現と行為というノエマ・ノエシスの相関に求められるのが「事実」である。こうして、場所的論理においては、すべてが表現であるとともに、表現と行為へと分化しつついく「事実」でもある。以上のように、「意味」を見据えつつ深化していった「事実」理解により「世界」をめぐる後期西田哲学の洞察が切り拓かれていった。

『無の自覚的限定』に至る場所的論理の形成過程で獲得された最も重要な成果は、意味と事実との関係をめぐる新たな理解である。深められた「事実」理解もまた、事実とは言表の内容であるとして、意味の観点からとらえられるようになる。これは、新たに位置づけられることになった実在が、まさに表現と行為の相関のことに他ならず、この相関の自覚によって表現作用としての事実が把握されるということに基づいている。つまり、事実は表現から自覚を通して見定められるのであり、ここにおいて明確となるのが、意味と実在とのあいだの決定的な差異である。つまり、意味から実在へと移行するのは絶対無の自覚によってなのである。ともに言表の内容として示される意味と事実を分け隔てるのが自覚という一点であるということが、場所的論理の枢要な論点となっているのである。

場所的論理の急所となっているのが、無自覚的内容としての意味と自覚的内容としての事実という対比であるということが、西田哲学の立ち位置を理解する手がかりとなる。場所的論理とは、このように到達される意味と事実をめぐる把握に他ならないのであり、西田はそれを弁証法のあるべき姿だと考えていた。しかし、それが意味の論理としての現象学から多大な影響を受けていることもまた確かである。西田は、これら両者のあいだで揺れ動きつつ、意味から事実への自覚による移行という思想を練り上げていったのである。

参考文献

- 朝倉友海（二〇一四）『「東アジアに哲学はない」のか 京都学派と新儒家』、
岩波書店
- （近刊）「呼応性と意味の論理 山内得立と高山岩男の考察をてが
かりに」、藤田正勝編『近代日本哲学と東アジア（仮題）』
- 大橋良介（一九九五）『西田哲学の世界』筑摩書房
- 岡田勝明（二〇〇八）「悲哀が言葉となるととき 西田哲学における「言語」
理解」『理想』六八一
- 小坂国継（一九九一）『西田哲学の研究』ミネルヴァ書房
- 瀧澤克己（一九七二）『瀧澤克己著作集一』法蔵館
- 田中潤一（二〇〇七）「意識における知識の構造」『メタフュシカ』三八
- （二〇〇八）「後期西田哲学における事実と知識の問題」、『待兼山
論叢・哲学篇』四二
- 丹木博一（二〇一五）「表現の否定的構造について 『哲学論文集第三』に
おける現象学的真理論」『西田哲学会年報』一二
- 張政遠（二〇一七）『西田幾多郎 跨文化視野下的日本哲学』国立台湾大学
出版中心
- 富山豊（二〇一四）「フッサール中期志向性理論における「対象」の同一性
と「ノエマの意味における規定可能なX」」『哲学』六五
- 西田幾多郎（一九七八—一九八〇）『西田幾多郎全集』全一九巻、岩波書店
- 藤田正勝（一九九四）「西田幾多郎とヘーゲル」上田閑照編『没後五十年記
念論文集 西田哲学』創文社
- フッサール、立松弘孝他訳（一九七〇）『論理学研究 II』みすず書房
- 長谷川宏訳（一九七五）『経験と判断』河出書房新社
- 渡邊二郎訳（一九七九）『イデー I-I』みすず書房
- 渡邊二郎訳（一九八四）『イデー I-II』みすず書房
- 立松弘孝訳（二〇一五）『形式論理学と超越論的論理学』みすず書房
- ヘーゲル、真下信一・宮本十蔵訳（一九九六）『ヘーゲル全集一 小論理学』
岩波書店
- 森哲郎（二〇〇八）「西田幾多郎の「表現」思想」『理想』六八一
- 山内得立（一九六七）『意味の形而上学』岩波書店
- （一九九三）『随眠の哲学』岩波書店
- リッケルト、山内得立訳（一九二七）『認識の対象』岩波書店

【謝辞】本研究は、JSPS 科研費 JP17K02155 の助成を受けたものです。

Keywords: 西田幾多郎 意味 表現 現象学 弁証法

The Problem of Sense in the Formation of the Logic of Place

ASAKURA Tomomi

Offprint from *The Kobe City University Journal*

Vol.68 No.2 (2018)